



# 小豆研ぎ

川崎ゆきお

「妖怪博士、今日もまた妖怪の話をお願いします」

妖怪博士付きの編集者が懲りずに通っている。これといった妖怪談を最近妖怪博士は語っていない。そのため最近は休憩で来ているようなものだ。出版不況と言われているのに、こんな呑気な編集者がいるのも妙だし、そんな余裕のある出版社も妙だ。

妖怪博士の本はここから出ているのだが、大した売り上げはない。増刷もない。

「そうだなあ、小豆洗いの話でもするか」

「古典ですか。それに」

「何だ」

「一度やったような記憶があるのですが」

「じゃ、小豆研ぎはどうじゃ」

「同じじゃないのですか」

「小豆洗いは小川など水のあるところで、小豆を洗っておる。いわば固定じゃ。小豆研ぎは山に出て、移動しておる」

「あまり変わらないと思います」

「米洗いでもいいのじゃが、小豆の方が音が立つ。砂洗いでもいいがそれでは味気ない」

「未だにサクサクとか、ざくざくとかですね」

「なぜ、そんなことをするのかじゃ」

「はい」

「小豆研ぎは警告じゃ」

「ほう」

「小豆洗いは人がいないような川で夜中小豆を洗っておる。ほとんど害はない。これは風情としてみてもよい」

「出かけるタイプの小豆研ぎは違うのですか」

「古い記録や、言い伝えでは山に出るらしい」

「川縁じゃなく」

「まあ、谷川まで降りれば水はあるだろがな」

「さっき、警告と言いましたが、それは溪谷と引っ掛けて」

「引っ掛けん」

「何の警告なんですか」

「深い山に入ったとき、明るいうちに戻れないときは野宿する。そのとき聞こえてくるらしい。ただ、正体を見た者はおらぬ」

「サクサクとか、ザクザクの音だけですか」

「そうじゃな」

「それが警告なのですか」

「ここで野宿、小屋がけしてはいかんとな」

「どうしてですか」

「通り道のためだろう」

「誰の」

「山の神の」

「もうそこで、話が藪の中です」

「軽い警告だな。小豆研ぎは」

「それはどういう意味ですか」

「ここで野宿しない方が好ましい程度だ。少し邪魔ですよ、程度だ」

「しかし、なぜ小豆研ぎなのですか。音だけでしょ」

「小豆を洗う音に聞こえるためだろう」

「じゃ、違うもので、そんな音を出しているかもしれませんね」

「そうだな。山の小豆研ぎは見た者はおらん。川の小豆洗いは目撃者がおる。小豆洗いは里に出る。小豆研ぎは深山に出る」

「昔は山は神様の住む場所だったのですよね」

「そうだな。その神様の邪魔をするようなところで、寝ておると、警告される。それだけのことだな。場所を変えればいい。通り道に当たるからだめなんだ」

「神々の通り道なのですか」

「通りの、魔だろうなあ」

「通り魔」

「里の者が通ってはいけない道があるんだ。山道でもな」

「道なんでしょ」

「自然に踏み固められた道で、まあ獣道のようなものじゃ。特に草地では何度も何度も動物が通るので、自然に道のような筋ができておる。それと同じように山の神が何度も通ると山道のように見える」

「博士、それは何処かに書かれていたことですか」

「ああ、そうじゃ。この前そういうのを続けて読んだ」

「はい」

「里の小豆洗いと、山の小豆研ぎ、これは研究材料になる」

「ものすごい細かい話です」

「先ほど警告だと言ったなあ。軽い警告と」

「はい」

「もし、山に詳しい者がそこにいれば、それで引き返すか、場所を変える。その程度じゃ」

「警告の次は何ですか？」

「次は警告と言うより、もっと強い目に出る。その通り道の奥まで行くとな。その場合、普通の森が多い」

「次はどんな目に遭いますか」

「石が飛んでくる」

「攻撃されるわけですか」

「これを天狗のツブテと呼んでおるらしいが、実際には命中せん。威嚇なのでな。人に当たるよ

うには投げんらしい」

「はい」

「大概の者はここで引き返す」

「危ないですからねえ」

「終わり」

「博士、それはないです」

「何が」

「そこまで話したのでしたら、正体を」

「それがよう分からん。何者の仕業かがな」

「山の民じゃないのですか」

「異人種と呼ぶこともあるらしい」

「それが、山の神の正体なのでしょ」

「まあまあ、急ぐな」

「小豆研ぎも、山の民がそんな音を立てていたのでしょ。天狗もそうでしょ。博士はまさか本物の神様が命じて、そんなことをしているとは思っていないでしょうねえ」

「私は妖怪博士だ。山の精、山の気というのがあるような気がする」

「それは妖怪というより精霊ですねえ」

「その気と天狗とは違う」

「山の気ですか」

「一人深山に入り、しばらくその辺りを歩いておると、おかしくなるらしい。だから、猟師などは一人のときは犬を連れたりする。当然踏み込んではいけない場所があり、そこは避けて通る。

これは野獣の通り道だからではない」

「博士、そこまで行くとファンタジーですよ」

「そうか」

「森の守り人なんかがいるんでしょ。ここは人が入ってはいけませんよと」

「そうなるのう。しかし、妙な場所があるんじゃ。私も何度か体験した。深山に限らず。そういう場があるんだ。深山幽谷と言うじゃろ。酸素が濃すぎたり、湿気が多いためかもしれん」

「はいはい」

「そうでないと、霊場や霊獣とか、言い出さんだろ。あれはやはり何かあるんじゃ」

「はいはい」

「もういいか」

「博士、悪い本を読みすぎですよ」

「うむ、私もそう思う」